

ナラトロジーによる教材分析の方法

上越教育大学学校教育学部 松本 修

キーワード：ナラトロジー、描出表現、語り手、標識、解釈、読みの交流

本発表は国語教育研究へのナラトロジーの導入状況について整理し、その方法の可能性を教材分析と授業実践への二つの観点から展望するものである。

1 国語科教育研究へのナラトロジーの導入状況

既に、田中実 1996 三谷邦明 1996a 1996b 山本茂喜 1995 中村哲也 1997 などの論考によって導入が行われているが、松本修の一連の言及において示したように、特定の解釈の正当性の根拠としてナラトロジーが援用されることが多く、個々の適用には問題がある。中でも描出表現（自由間接話法）の適用をめぐる問題が認められる。

「羅生門」における老婆の弁明をめぐる田中・三谷の見解を示すと次のようになる。(1)

しからば、〈語り手〉の判断とはいかなるものか。述べたように、老婆の〈ことば〉は生きるための方便である。その老婆の〈ことば〉は考える男である下人には伝わらない。下人が行為を獲得し、「夜の底」に駆け下りていくときのある種の「解放」感、それこそ〈語り手〉の批評の対象であり（小説は決して主人公の主観が作品の空間の全てではない）、〈語り手〉は下人が己の既成の〈観念〉によって〈世界〉の方を組み替えてしまう、その若々しい倨傲と錯誤、観念の陥穽にあることを語っていたのだった。認識の無根拠性、観念の陥穽こそ『羅生門』という装置によって産出されたのである。(田中)

下人（失業者）や老婆（零細商人）とは異なり、近代の知識人は、饑死＝

死に正面から対決できずに、無責任な悲哀に満ちた言葉を饒舌に振り撒いているだけなのである。『羅生門』は、古典をプレテクストに利用しながら、意外にも、近代の知識人論なのであり、〈小説を書くこと〉が表現主体の自己否定とはならないことを、自虐的に描いたテクストなのである。(三谷)

田中の解釈は、「下人が直接聴き取ったことは、〈語り手〉の表現とは別、読者は〈語り手〉の表層の〈ことば〉とともに、言い換えの奥にたどたどしく聞こえる老婆の〈ことば〉を探りあてなければならない」という通り、「老婆の肉声としての〈ことば〉」と「下人の聴き取った（理解した）〈ことば〉」、さらに「語り手の表現」を分離した上で、老婆の「生きるための方便」、下人の「観念による曲解」、語り手の「下人への批評」という構図をそれぞれに対応させてあてはめるという手続きによって導かれている。すでに指摘した「語り手の統御の強さ」を、語り手の語りの批評性という点に見ているという特徴がある。この解釈には、初出における老婆のせりふ相当部分が間接話法であることも影響しているものと思われる。

三谷は、老婆のかぎ括弧の中のせりふを直接話法ではなく間接話法として把握する。かぎ括弧の直前の「……口ごもりながら、こんな事を言った。」という一文を自由間接言説と把握した上で、下人が耳で聞いたと認識している内容そのものがかぎ括弧の中に示されていると判断している。三谷のこのような会話文の把握は、読み手が下人への寄り添いを強め、むしろ語り手そのものに対して批評的態度をもつものとして読みを進めていくよ

うな形で、解釈を引き出していくという道筋につながる。

同一箇所の子りのありようの見方が二人の読み手によって大きく異なること、そして二人の読み・解釈が大きく異なることがわかる。

むしろ子りの分析は、個々の解釈が形成される読みのプロセスそのものを明らかにしつつ相対化し、読みの交流を可能にするための基礎としてなされるべきである。

なお、「山月記」をめぐる一連の議論(2)、「ごんぎつね」をめぐる一連の議論(3)がある。

2 子りの分析の事例

「走れメロス」冒頭部を掲げ、分析の事例を示す。

メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治が分からぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。今日未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里離れたこのシラクスの市まちにやって来た。メロスには父も、母もない。女房もない。十六の、内気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村のあるりちぎな一牧人を、近々、花婿として迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それ故、花嫁の衣装やら祝宴のごちそうやらを買いに、はるばる市まちにやって来たのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今はこのシラクスの市まちで、石工いしくをしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。

作中人物の呼称は、三人称で「メロス」「セリヌンティウス」「妹」などとなっ

ており、語り手は作中人物としては現れない。物語内容からは超越した語り手であるが、メロスの妹を名指さず、「妹」とのみ呼ぶことによって、メロスに焦点化しているとも言える。文末表現を見ると、「激怒した」「決意した」などのタ系列が7文あり、「牧人である」「二人暮らしだ」などのダ・デアル形が5文ある。語り手の判断が示されるとともに、説明的な語りになっており、一部メロスの心理に立ち入っている。一般にはタ系列の文末表現を時制上の過去とする判断がなされているが疑問である。この「走れメロス」の冒頭部については、工藤真由美が次のように述べている

このシタ形式も、〈過去〉というダイクティックなテンス的意味を表していない。過去形が表しているのは、いわば〈叙事詩的現在性〉である。時間の基準軸は、現実の書き手(読み手)の今ではなく、いわば作中人物の「今」にあるといえよう。

中略

かたりのテキストでは、現実の発話主体による発話行為の場へのアクチュアルな関係づけが存在しないがゆえに、過去形が、過去という〈ダイクティックな現実的時間〉を表さず、〈非現実的時間＝叙事詩的時間〉として機能する。とすれば、作中人物＝3人称者も、現実の発話主体＝1人称者との関係づけなき、1・2人称との対立関係のなかにはない〈人称の不在〉である。1・2人称との対立関係のなかにある〈はなしあい〉の場合と、〈かたり〉の場合とでは、3人称は同一の価値をもっていない。柳父章 1976 は、「1.5人称」という卓抜な言い方をしているが、「彼は悲しかった」という、はなしあいのテキストでは許されない文の存在根拠は、ここにあるというべきであろう。(4)

文学テキスト(かたりのテキスト)においては、生身の語り手の現実世界における場、時間の拘束がない。通常なら、

「私は激怒した。」という文は、私という発話者が、私が激怒するという行為・状態を、発話の現在から以前にさかのぼって経験したという意味合いを持つ。しかし、ここでは、「メロスが激怒する」という行為・状態が非現実的時間の中に位置づけられるのだという。そもそも現代日本語の「タ」は、過去と完了の意味を担っており、語りのテキストの場合、語りの現在が文脈によってあからさまに形成され、どのような語り手がいつ誰に向かって話をしているかということが語りの状況として整えられない限り、単純に過去を意味するものとは捉えにくいということがある。「メロスは激怒した。」という一文は、「メロスという人が激怒すると、そういうことがある(った)のですよ。」というような意味合いで受容される。従って、特にタ系列以外の表現との交替が意味を持たない限り、タ系列の表現は、積極的に時制上の過去を表すものというより、無標に近い表現とみるべきであろう。

また、ここで関連して述べられている三人称の特殊性は、語り手像のあり方と関連している。「だ」「である」を含む文末表現をとっている文では、語り手の判断(この場合断定)が示されている。語り手は三人称メロスの内面における「激怒する」「決意する」という心情を「人称の不在」を通じて語っている。しかし、語り手の一人称性・人格性が全く欠如しているかというところではなく、「メロスは、村の牧人である。」という形で、三人称メロスの属性を、外側から判断する主体・一人称の存在として判断し、説明してみせる。この中間にあるのが、「メロスには政治がわからぬ。」というような表現であろう。語り手はこのような振幅をもって、この物語を語り手は語っている。

物語の冒頭部においては、しばしば語られる物語の状況が説明され、いわゆる設定がなされる。そこにあつては、語り手はその語り手のとる位置をある程度明

らかにすることになる。これが語りの基本構造として読み手に把握され、読み手はその語りの構造に沿って読みを展開することになる。もちろん、語りの構造の把握は読者側の関与によるものであるから、読者によって、語り手の位相の把握は微妙に異なるであろう。読み手と語り手との鏡像関係的な語りの基本構造は、そのような相対性を持っている。

3 語りの分析の枠組み

ナレーションを中核としたナラトロジーでは、フランツ・シュタンツェル、ジェラルド・ジュネットらの理論が読まれているが、日本語では時制のあり方や動詞の活用など事情の異なる側面もある。また、ジュネットの研究自体、特定の作品の分析の形で提示されており、文法用語を借用してはいるが、文法的な枠組みを定立することの難しさがある。ナレーションに関する分析は、そのもっとも微妙な形である描出表現の分析に典型的な形で現れる。日本語の描出表現の分析に関与する標識として明示的にあげられているのは、次のようなものである。(5)

- ・感情・感覚述語(恥ずかしい、苦しい、好きだ…)
- ・視覚・聴覚述語(見える、聞こえる、見る、聞く…)
- ・思考述語(思う、思われる、思える…)
- ・てくる、ていく
- ・場所・方向・時間の状況成分(今日も、右手には…)
- ・叙法副詞(どうも、おそらく、多分…)
- ・主観的助動詞(よう、らしい)
- ・副助詞(だけ、なんか)
- ・再帰化(自分)

他にも、引用にかかわる記号類(ダッシュ、……)、引用を伴う「いう」などの動詞、総称文などがあげられる。しかも、それらは近傍の文に含まれる場合もあると同時に、それらの標識を根拠とした判定は大きく読者の読みとりかたに依

存するというような指摘がなされている。

(6)

こうした要素に加え、時・場・人にかかわる様々な要素が、ナレーション分析にかかわってくることになる。

4 学習活動への展開

「知れメロス」の一節に次のような表現がある。

わたしは、みにくい裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬるかな。――四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、潺々、水の流れる音が聞こえた。そつと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。すぐ足下で、水が流れているらしい。よろよろ起き上がって、見ると、岩の裂けめからこんこんと、何か小さくささやきながら清水がわき出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメロスは身をかがめた。水を両手ですくって、一口飲んだ。ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復と共に、わずかながら希望が生まれた。義務遂行の希望である。

「歩ける。行こう。」を自由直接話法と判断する読み手は、メロスの意識により近く寄り添っている。また、これを語り手のメロスへの語りかけと判断する読み手は、語り手と物語世界との関係を考慮にいれつつ対象化していると言えるかもしれない。読み手自身のメロスへの語りかけと判断する読み手は、メロスを対象化しつつも、自らを物語内容の世界に積極的に関わらせているとも見える。いずれにせよ、読み手の読みの相違がどのような標識をもとにどのような判断をしたかということによって、相対的に明らかになることが重要であり、このことによって、互いの解釈の違いを了解することが可能になる。「わたしは、信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。走れ！メロス。」という「走れ！メロス。」

の声は誰の声かということを問うたとき、この作品に対する相異なる解釈を分ける分岐点が現れる可能性がある。文学作品を教材とした授業においては、読みの成立とその交流がともに重視されなければならないが、ナラトロジーによる分析はそのような授業に一定の足場を提供するものである。

注

- 1 田中実「批評する〈語り手〉」『小説の力―新しい作品論のために―』1996（初出『国語と国文学』1994.3）大修館／三谷邦明「『羅生門』の言説分析―方法としての自由間接話法あるいは意味の重層性と悖徳者の行方―」『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』1996 a有精堂／松本修「『羅生門』の〈語り〉―教材研究におけるナラトロジー導入の可能性と問題点―」『日本近代文学』第57集1997.10
- 2 田中実「〈自閉〉の咆哮―中島敦『山月記』前掲書（初出『日本文学』1994.5）／三谷邦明「中島敦『山月記』の虚構構造―言説分析の視点から―」『日本文学』1996.7 = 1996 b／松本修「話法と読者―「山月記」『月刊国語教育』214 1999.1 東京法令出版／馬場重行「〈語り〉の在り方をめぐって―中島敦「山月記」の場合―」『月刊国語教育』222 1999.8 /松本修「文学教育のナラトロジー」『月刊国語教育』227 2000.1 /松本修「ナラトロジーの役割―「山月記」を具体例として―」『読書科学』172 2000.7
- 3 山本茂喜「「ごんぎつね」の視点と語り」『人文科教育研究』22 1995.8 人文科教育学会／中村哲也「国語教材研究への文体論的アプローチ」『国語科教育』44 1997.3 全国大学国語教育学会／松本修「国語科教材研究における「視点」概念の問題―「ごん狐」をめぐって―」『国語科教育』44 /松本修「「ごんぎつね」における自由間接話法」『読書科学』164 1998.7 /松本修「「ごんぎつね」の最終場面における読みの多様性」『月刊国語教育研究』336 2000.4 日本国語教育学会
- 4 工藤真由美『テンス・アスペクト体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』1995 ひつじ書房 pp.20-21（柳父章『翻訳とは何か』1976）
- 5 野村眞木夫「話法をどう捉えるか―日本語体験話法―」『表現研究』38 1983.9 表現学会
- 6 野村眞木夫「描出―テキストの研究にかかわる一つの問題提起―」『上越教育大学国語研究』10 1996.2 上越教育大学国語教育学会